



営農NEWS



キュウリやトマト栽培での微小害虫（キュウリ黄化えそ病や トマト黄化葉巻病などの媒介虫）防除を励行しましょう

キュウリやトマトに寄生するコナジラミ類やアザミウマ類、アブラムシ類など微小害虫は、作物を直接吸汁して被害を生じる他、各種のウイルス病を媒介して、甚大な被害を発生させる場合があります。

キュウリのウイルス病には「黄化えそ病」や「退緑黄化病」、「黄化病」、「各種モザイク病」などがあり、また、トマトのウイルス病には「黄化葉巻病」、「黄化えそ病」、「黄化病」や「各種モザイク病」などがあります。

キュウリ黄化えそ病はミナミキイロアザミウマが、退緑黄化病はタバココナジラミが、トマトの黄化葉巻病はタバココナジラミが、黄化えそ病はアザミウマ類が、さらに、各種モザイク病はアブラムシ類などが媒介します。

本年は暖冬で、越冬作型でも微小害虫の発生が平年よりやや多い傾向で経過していると推察されます。

なお、これらの圃場内での発生量を十分に確認することが難しいことから、下記を参考にして、耕種的や物理的防除と薬剤防除を組み合わせた総合防除で対応する必要があります。

＜防除対策のポイント＞

防除の基本として、栽培施設に微小媒介虫や病原ウイルスを①入れない、また、②そこで増殖させないことが重要です。①施設に入れたい対策として、出入口や天窓・側窓など開口部に防虫ネット（タバココナジラミには目合い0.4mm）を設置し、また、施設外や内に雑草等があれば、常に除草を徹底してください。特に育苗中は注意して、ウイルス潜在感染株の持込や微小害虫の侵入などを注意深く遮断することが必要です。②増殖させない対策としては、常に作物を観察して早期発見に努め、発病株の抜き取りや媒介虫の防除を行います。なお、施設内に青色や黄色の粘着トラップを設置して誘引し、密度の抑制を図るほか、薬剤防除時期の目安にします。薬剤散布は、抵抗性害虫の出現を防ぐため、同一分類（コード）の連用は避けます。さらに、栽培が終了したら③害虫が施設から逃げ出す前に、蒸し込み処理などで死滅させることで、周辺ハウスや雑草への飛散防止、次作での侵入抑制効果が期待されます。

表1 キュウリ コナジラミ類、アザミウマ類、アブラムシ類の主な防除薬剤（令和2年2月6日現在）

薬剤名	コナジラミ類	アザミウマ類	アブラムシ類	希釈倍率	使用時期／使用回数	分類
モベントフロアブル	○	○	○	2,000倍	収穫前日まで／3回以内	23
グレースシア乳剤	○	○		2,000倍	収穫前日まで／2回以内	30
ベストガード水溶剤	○	○ミナミ	○	1,000～2,000倍	収穫前日まで／3回以内	4A
アフーム乳剤	○	○		2,000倍	収穫前日まで／2回以内	6
コルト顆粒水和剤	○		○	4,000倍	収穫前日まで／3回以内	9B
サンマイトフロアブル	○		○	1,000～1,500倍	収穫前日まで／2回以内	21A
ウララDF	○		○	2,000倍	収穫前日まで／3回以内	29
			○	2,000～4,000倍		
ディアナSC	○	○		2,500倍	収穫前日まで／2回以内	5
				2,500～5,000倍		

表2 トマトとミニトマト コナジラミ類、アザミウマ類、アブラムシ類の主な防除薬剤（令和2年2月6日現在）

薬剤名	コナジラミ類	アザミウマ類	アブラムシ類	希釈倍率	使用時期／使用回数	分類
ディアナSC	○			2,500倍	収穫前日まで／2回以内	5
		○		2,500～5,000倍		
モスピラン顆粒水溶剤	○	○	○	2,000倍	収穫前日まで／3回以内	4A
グレースシア乳剤	○	○		2,000倍	収穫前日まで／2回以内	30
コルト顆粒水和剤	○		○	4,000倍	収穫前日まで／3回以内	9B
ウララDF	○	○ミカン		2,000倍	収穫前日まで／3回以内	29
			○	2,000～4,000倍		
アニキ乳剤	○	○ミカン		1,000～2,000倍	収穫前日まで／3回以内	6
モベントフロアブル	○	○	○	2,000倍	収穫前日まで／3回以内	23

注) 1. 表中のアザミウマ欄、ミナミはミナミキイロアザミウマ、ミカンはミカンキイロアザミウマの農薬登録です。
2. 分類欄には、IRACコードを記載しました。同一分類（コード）は作用点が同じなので、連用は避けてください。

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。

※JA全農いばらきホームページでもご覧になれます。

